

男性自身新春放談第二弾 鶴田浩二

「若者たちよ、「男の義」というものについて語り合おう」

＝「男たちの旅路」などで話題の俳優の「かたくなな日本人」論

松竹の二枚目、東映仁俠映画の大幹部、テレビ番組のビッグスター。

その間に演じた、特攻隊員、ヤクザ者、強い中年男。

「俳優、鶴田浩二には、しかし首尾一貫した「男の心」の「表現」がある。

その人が本誌読者諸兄に語りかける「傷だらけの人生」——。

「ボクは堂々と胸を張ってグレていた」

放談とはいっても、ボクは一介の役者です。芸能の世界の人間にはそれなりの境界線がある。勝手なことをいって、人に影響を与えたり、迷惑をかけたりすることは避けなきゃならない。つまり、お説教や教訓を垂れるガラじゃない、ということですよ。運動部の後輩に、なんだこの野郎、っていうようなわけにはいかない。

それに、いずれしゃべっているうちに出てくると思いますけれど、ボクは人に自分の考えを押しつけるのは好きじゃない。そりゃ、おとそを飲みながらの放談だから、いろんなことしゃべり出しますよ。でも、そここのところだけは承知しておいてください。

ボクは中学生の時にグレましてね。それには理由があるんですが……。もちろん「硬派」です。いまの「ハレンチ」なんぞとはわけが違う。グレたというのは、あくまでも正面向いて、「いったいなにが悪いんだ」と、正々堂々胸を張り、本名を名のって、顔をさらけ出して「悪いこと」をすることだった。

もちろん、ケンカやって傷つき傷つけ、あげくの果てがブタ箱というのは、それ自体いいことじゃない。しかしケンカをしても、いつも胸を張っていました。

女性のほうはむしろオクテでした。いま思えば惜しい思いをしました。いくつのころでしたかね。そのときの感覚では、はるかに年上の人のように思えましたが、22歳ぐらいの女の人にいきなり手をとられ、腕を組まれたわけです。

もちろん、生まれてはじめての経験です。体の中心から女性側にある半分が、まるで自分のものじゃない感じだ。歩けなくなっちゃってね。まるで操り人形です。そしてすれ違う人が、みんなボクを見ているような気がするんだ。なにしろ、硬派をもって任じているわけですから、恥ずかしかったんでしょうな。

15歳で酒、つぎが煙草、女性が一番あとでした。といってもまだガキの頃だ。親にしてみれば、もうどうにもならないという見本みたいなものだったでしょう。おフクロに、反抗もしました。さっきグレた理由があるといいましたが、それは中学二年のときに、親父が違うことかわかったからなんです……。

親たるもの、たいがいのことは子供のために我慢すべきじゃないですか。それが親としての義務だと思う。もろもろの事情があったでしょう。性格が合わない、生理が合わない、それはいろいろでしょう。

性格の不一致なんて当然のことです。生まれが違い、育ちも違う。決定的には生理が違う。まったく違う男と女が好きだ愛しているということで一つ屋根の下に生涯を共にする。これをもって家庭生活と呼ぶわけで、違うのがあたりまえなんだ。

だから、それを理由に立てられてはボクのような子供は困るんです。いうなら他の理由にしてほしい。「こういう状況の中で一人前の男に育てることはできないから、離婚する」たとえばこんな理由ならわからんでもない。

……話が急にそれちまったが、要するにボクは中学生からグレていた。しかし幸い、いくつかの年代を経て、こうしてしゃべっている。つまり、これからの話も、ボクの体験が生んだ考え方だから、参考として聞いてほしいわけです。

「赤線にはそこでしかわからない浪漫が」

若い読者の多い雑誌だそうですから、いまの若い人について話しましょうか。といって、いまどきの若い者（もん）は、といえるほど立派なことやってきたわけではないんだ。ボク自身を含めて、いまのおとなは、もっと反省しなければね。ボクだって日々アクティブにやっているかと自問しても、100%自信はありません。

いまの若い人は、希望や目標を失なっているという。その通りだと思う。いまのこの世の中で、若者に目標や希望を持つというほうが無理ですよ。根本的なところを直さないかぎりダメだ。“汚ないもの、”が闊歩しすぎてるじゃないですか。政財界でもどこの世界でも日常茶飯事でしょう。こんな中で希望を持つというほうがおかしい。

こんな世の中を直すのは、おとなの務めです。臭いものには蓋というナアナア精神じゃダメだ。おとなたちが怠けているんです。ボクも含めてそうです。

しかし根本的なことでいうと、ボクはいいたい。もっとフィニッシュをきっちり決めてほしいと。田中角栄、海部、KDDカラなんかまで不祥事件が多い。古くは昭和電工や造船疑獄、全部うやむやですよ。ボクはこの国のフィニッシュのあり方がいかんと思うんです。社内的な手柄だとか、サラリーマンの鑑たるべきサムライだとかいうけれど、サムライというのは事を起こすけれども、ちゃんとフィニッシュするんです。最後は腹切るんですよね。そして申し開きする。それでこそはじめて、あ、わかりました、となるわけじゃないんですか。

いまは、そのフィニッシュの仕方が実に曖昧です。みんな相手に責めを負わせ、足を引っ張り、自分だけ浮上しようとする。自分の曖昧な部分や悪事は糊塗してしまう。ボクはそれが我慢ならんわけですよ。うやむやで済むも済まないも、悪事は悪事。それをきちんとするのが法治国家の行政官じゃないですか。中途半端にしちゃいけないんだ。それが許されるから、いまの若者は腹を立てるんですよ。

ボクもいま若かったら、それらに真っ向からぶつかりたい。しかし、どうにもならない鉄のような壁がある。だから、そこに爆弾でも放ってやろうかとなるわけだ。それはわか

らんでもないよ。ただ、爆弾は、現実としてアプローチの仕方が無差別だし、やる若者たちは覆面だしね。やるなら、確固たる信念で挑み、名乗ってやれなくちゃね。

ともかく、いまの世の中になった大もとは、アメリカの植民地政策にはじまるわけです。戦勝国は、敗戦国に対してある政策を試みなきゃならん。

その一つが3Sシステムといって、シネマ、スポーツ、セックスの三つでしばって、キンタマまで抜いてしまえということです。そして、日本の歴史をぶつつぶして塗りかえてしまえ。次は日本人の一番強いもの、特攻隊などというものを生み出す民族としての家族制度もぶつつぶせ。教育も、完全に変えてしまえ。¹

これを何年かがかりで、彼らはやったわけだ。それは60%ぐらい成功したかな。その結果がいまの日本の姿ですよ。家庭で親は、そして学校で先生は、子供たち若者たちにむかってなにもいえない。手一つ出せない。だから、いまの若い者といっても、彼らの責任は半分もないのじゃないか。

しかし、こういう世情に唾(つば)してやりたいと思っている若者もいるでしょう。ただ、いまの若者に最も欠けているのは“反発心”だと思います。特定のことで決めつけられると、もうそこへ刃向かっていけないんだ。どうせオレなんかがやったって、とゆがんでいく。これは逃避です。与えられた状況に対して押し返せない。そこへはとても行けないと横にそれる。そしてひがむか、あるいはもっとあさましいことをやる。つまり方角が違うわけですよ。

浪漫の精神も希薄ですね。あまりにギスギスした“利害”が表へはびこり過ぎ、“情”の部分の割り込むところが少ないから仕方ないといえばそれまでだけど。しかし、朴歯のゲタに破れマントで闊歩するという青春の浪漫みたいなものは、そこを経てみなければわからない。

昔は女郎部屋から大学へ通った学生もいた。ボクも赤線から撮影所へ通ったなんていわれた時期があった。そこにはそこでしかわからない浪漫があった。知らなければ知らないで済んでしまうというのは、非常に残念なんだな。

「三島さんは真の“武士”だと思います」

三島由紀夫さんが自害して10年たちましたね。ボクはあのとき、なにひとつ語らなかつたんですよ。5年たち6年たち、10年たって、三島イデオロギーがどういう形で中に残るか、どういう影響があるか、それは年月がたってみなければわからない、いま軽々しくいえることではないと考えていたんです。どこの新聞社から意見を求められても、ボクはひと言もいわなかつた。

10年たった²いま、少しだけだがそれがいえそうな気がします。人間には個人差があるからそれぞれに意見がある。ただ、最も大事なことは、状況をきっちり把握し、その中で

² GHQの民間情報教育局(CIE)が担当した「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」“WGIP”の一環ことか？

² この年の憂国忌(11/25)に合わせてか、「さすらいの人生」EP盤を発売。歌詞は三島に関して書かれている。10年かかって区切りをつけたのだろう。

最大公約数はなにかということを決めることです。そしてつぎは、それに向かって、たった一つしかない命をどうするのか、ということを決めなきゃならない。

三島由紀夫さんという人は、頭がたいへんシャープであった。しかし待てなかったというか、つくり得なかったというか、先へ行ってしまったというか。別のいい方をすればノーマルでなかったというか、極言すれば、いまいった状況判断の最大公約数をはっきり把握できなかったのではないか。あのときそういうことをいった人もいましたが。

いま10年たってみて、ボクは三島さんが一番メリットのあるものは文学の世界だと思います。これは10年前と変わっていません。それなら、文学を通じてもっと闘ってほしかった。ひとつの出来事が、アタマからケツまで、よかったか悪かったかなど誰もいえることじゃない。ただボクは三島さんを“武士”だと思います。

ある罪を犯し、それを10分たたないうちにきっちりフィニッシュした。それもひとつしかない命をかけてです。願わくば情念の世界を、文学という世界の中で、根気よく、しつこく灯を絶やさないという姿勢を、とられていたら……と思うんです。

檄の中で諸君は“義のために死ぬるか、”という意味の言葉がありましたが、ボクは三島さんに、年月をかけてでもいいから、“義”なら義という言葉、日本人にきちっとした作業で伝承してほしいと思ったんですよ。義というのは、仁義とか義理という言葉の持っている響き、意味、重さなど、そのこと自体がもう論議でき得るものじゃない。義の本質がわからない人に義を問うこと自体、ちぐはぐなんだ。

あの時の自衛隊員の中に義という言葉を知る者はいなかった。「太平記」には“仁をもって国を治め、義をもって人心を司どる、”と明記されてます。この仁義というのは、人間の生活の底辺なんですね。そこを三島さんにやってほしかった。

あくまで私見ですけど、結局は残念だった、ということです。この気持をもっと深くいえば、“同志失なえり、”みたいなことですね。しかし、三島さんは事を起こし、きちっとフィニッシュをつけた。

かつて特攻隊をつくったといわれる大西滝次郎中將も敗戦翌日の末明に腹を切った。しかし、大西中將をそこへ送り込んだ人は、フィニッシュしてない。ボクは最初にいいましたように、何事も人に押しつけることが嫌いです。自分の過去を含め、オレはこうしてきたからオマエたちも、といういい方はしたくない。

でも、義の問題が出たついでにいわせてもらえば、もう11年も遺骨収集は、目立たないようにやっています。ほかにも戦友同士のこと、ご遺族のこととかやっています。これは人間としての“後始末、”じゃないか、と考えてね。

そういうことから、たとえば靖国神社というのは、なぜ国家運営にならないのか、と思うんですよ。これは本会議に一回もかからず、三年間くすぶって、なくなっちゃったんですよ。その理由も明快にされずに、です。右とか左とかいうことをいつているわけではない。いまは言論の自由の時代でしょう。たとえばなぜこういう問題に執念を燃やすジャーナリストがないんですかね。

芸能記者だって、百恵クンが三浦クンと乳くりあったとか、森クンと大原クンが同棲しているとか、誰クンのアパートの鍵をどうとかもいいたろうけど、もっと奇妙なことが多

いんだから、そっちのほうが面白いと思うんだ。刃物だけが凶器じゃなく、ペンもそうなんです。凶器として受けとり、脅える人がいるほど威力があるんです。それを弱者に向けて強者に向けるべきだ。その姿勢こそ義だと思います。仁だと思いますよ。仁と義こそ、人間生活の底辺というか基盤だと思うね。

「ほんとうは作家になりたかった……」

東映の『仁俠路線』ですか。あれはマスコミがつけた名前ですね。アウトローの世界へカメラを持ち込んだのはこういうことでした。

アウトローの世界は実に単純明快です。理屈は抜きです。一つのものに命を張る。命は昔も今も未来も一つしきやない。これほど単純明快な話はない。それをめぐって、人間が泣いたり笑ったり手を握ってみたり、あるいはそれを利用してほくそ笑むヤツがいたり。これがアウトローの世界の物語なんです。きわめて単純なんです、単純であればあるほど表現力は強い。

また、身はヤクザであっても、というのはひとつの表現であって、人間は生まれたときと死んでゆくときは同じなんです。どんなプロセスを経ていようと、死ぬときは同じだ。それがなんでヤクザの世界へ入ったか。それにはそれなりの理由がある。家庭、親兄弟、世間の中の自分、それなりの理由がある。そこには親の責任もあるし、世の中での責任もある。しかし、その誰をも恨まずに、じっと耐えた男の姿はどうなんだ。いい条件の人間がお天道さんの下を闊歩しながら、彼らよりひどいことしてるじゃないか。世の中どうなってるんだ。——こういうことで東映の俊藤（浩滋）さんと共鳴したんです。

ボクが演ってきた映画の中の男を思い出していただければわかります。ボクはそういう男しか演ってこなかった。着流し姿がどうの、うしろ姿がどうのとかは、いまいったことのバリエーションで、哀しみを背負った男は哀しいにきまっています。

オレたちは屑だ。お天道さんの下をまともに歩けない日陰者なんだ。しかし屑には屑の生きる道がある。屑でもこれを守らにゃ生きていけないんだよ。陽の当たる場所にいる人間が、いったいなにを守って生きてんだ……。こういうことをいってるわけです。大もとの反骨精神なんです。

カッコいいとか悪いとかの問題じゃない。「雲流るる果てに」も「人間魚雷・回天」も「傷だらけの人生」も「総長賭博」も、役者としては同じ精神でやっているんです。状況が違うだけで、訴えていることは同じです。だから受け入れてもらえたと思っています。

ところが、それがテクニクに変化してきた。つまり『仁義』が『ドンパチ』に転換しました。その時点でボクはリタイヤしたんです。

NHK「男たちの旅路」はちょっときつい面もある。建て前ばかりいっている。ボクは建て前じゃないほうの男だし、生身の人間です。あんな主人公は世の中にいないよ。あれは『理想』です。しんどいけど、山田太一さんという人がボクをよく理解してくれている。ボクの憧憬置くあたわぎるところを、よくご存知なんです。それは心憎いほどです。だから、てにをはのひとつにいたるまで正確に演ろうと思う。

ボクはほんとうは作家になりたかった。中学のとき、あらゆるものを読破した。蔵書も

西田幾太郎、三木清の金箔の本を含め、自慢できるほどあった。残念ながら、海軍へ入るとき郷里の浜松へ送って、全部焼いてしまいましたかね。作家になりたかったといいましたが、ボクのように頭の悪いヤツはこと志と違ってくるんだね。

それではからずも、なにかを表現したいということが、幸か不幸かこういう役者につながったわけです。もの書きのことも、だから多少は理解しているつもりです。1枚書くのに5枚分ほどを整理するんです。その残りの4枚を想定して、書かれた1枚に集約するのが俳優なんですよ。

それだけに、書いてあるものは正確にやりたい。だから、ボクは「かたくな、だっていうわけ。いままでも、かなりかたくなにしゃべってきたけど、そのかたくなさが通用するのも役者でメシが食えるからで、きっと世間一般じゃ通用しませんよね。

何度もいうけど、押しつけというのは、いい気になるということでしょう。だから、せめてそれだけは出すまいと思っているんです。それが人間として大切なことじゃないかと思っ

「松竹大船撮影所、佐田啓二、高橋貞二…」

志を持って胸は張っていたものの、懐中一文なしの時代が長かったな。松竹の大船撮影所へ来たときもさんざんだったよ。撮影所の指定旅館³に泊まっていたんだけど、もちろんカネを払わなきゃ泊めてくれません。しかし松竹からもらうのは1万5千円か2万円。もちやしない。そしたら、そのオヤジさんがいった。「浩ちゃん、カネなんかあるとき払えばいいじゃないか」そうか、ってんで、家族の部屋へ行ってメシは台所で食うようになった。そして娘さんを風呂に入れてやって、「家庭サービスしてんだからマケろ」なんていって、タダにしてもらっちゃった。

撮影所近くの食堂だって、安いほうばかり。亡くなった佐田啓二や高橋貞二なんかもそうだった。みんなカネがなかったな。それで借金がたまる。ところが、当時の撮影所長が、「カネはなんぼでも貸す」っていう。ありがたがってどんどん借りた。ボクはもらってたと思ったわけ。そしたら別途の借金に計上されてた。いざというときの足枷にするわけね。当時の「松竹商店」ってそういうところでした。

ともかく、そうこうするうちに、カネが入るようになった。そうしたらその所長が、「家を持って」という。そうですかって浜松から親を呼んだ。

そのとき隣組になったのがお医者さん。ボクはまだメチャクチャやってる最中だし、ケンカばかりして、そのお医者さんを夜中に叩き起こしてケガの手当てしてもらった。そのお医者さんや、旅館のタダ住まい当時の仲間のワルとは、いまでも年に一回は会うことになってます。ボクが（東京の）等々力に家を建てた時⁴だから、もう23、4年続いているわけです。

その始まりがヒドいんだ。「おい鶴田、昔の仲間が年に一回、安酒のんでバカ騒ぎする

³ 旅館「志保原」

⁴ 世田谷区玉川野毛町にS32.7に引っ越す。S33.12.6の誕生日の様子がラジオ東京テレビ(TBS)で放送されたようだ。

から会をつくれ」というんだ。「いいよ、でも費用はどうする」というと、「お前が一番稼
ぎがいいから払え」で、いつにするという、カネを出すんだから、お前の誕生祝いにし
てやる。してやる、ですからね。

それで12月6日と決まったんですが、いまもってハガキ一枚出さないし、電話一本か
けない。それでも心あるヤツが集まってくる。いまでは記者の人もいっぱい来ます。昔の
友人もいるし、新しい人も来ますよ。その時のわが家は大騒ぎになる。

「いまでも学生服を着て学帽もかぶる」

ボクは、度合いとしていけばいまや“家庭人”です。ボクも凡夫ですから、こうしたい
というときもある。しかし、いま23歳、21歳、19歳と娘がいるんです。もうその娘たち
が傷つくようなことは、どんなことがあってもしないつもりです。

かつては、そりゃ友だちとグループ作ったりして⁵借金だらけだったこともあった。ボ
ク自身、特攻帰りというおつり人生の感じが強く、宵越しのカネは持たないほうだったか
ら、いくらあっても同じだったんですよ。

それが、長女が幼稚園に上がった時点で、遅まきながら気づきました。まア、これは人
間の責任ですよ。女房はいいですよ。俗に言えば惚れて一緒になったんだから、苦勞し
ながらも、どちらかが棺桶へ送るまでつき合って線香立てりゃいい。

ところが子どもはそうはいかない。自分たちの責任で生んだんだから、自分たちの責任
で育てなきゃいけない。それには基礎をつくってやらなきゃね。われわれじゃない、子供
のためだと。あたりまえのことですが、それから借金払って、貯金通帳を持つように努力
しました。だから、いまは家庭人としては、非常にまともな道を歩いていると、思いま
す。

その娘たちが、もうおカネを貯めているんです。ドラマに出て、着るものも交通費も親
がかりで、食うものもそうでしょう。自分がもらうカネは全部貯金です。驚いたよ、ボク
のヘソクリより多いんだ。アツタマにきちやうよ。

ボクは“ケンカ鶴”といわれたぐらいケンカっ早い。いろんな会社や人と、いろんな状
況で、いろいろなケンカをしてきた。しかし、泣き虫でもあるんです。すぐ泣いちゃう。
それでいつも笑われます。

酒を飲むと、海軍へ行って、ここへ行って、こうなるとひと通り順序があるんです。
自分じゃ気がつかないけど。そして、「あいつは先に逝った、オレはそれを思うと
……」とって、ひとしきり泣かないと終わらないんだ。

ところがある日、女房のヤツが、「海軍の話は耳にタコができるほど聞かされた」と、
仲間に向かってゲラゲラと笑いおったという。翌日、それを聞いてボクは怒りました。

「お前、それはジョークか本気か、それによっては離婚の手続きをとってやる」といった
わけです。そうしたら、「ジョークです」というから、それなら許してやるよといった。

そして、「しかし、よく考えてみろ。一人の人間に同じことを何十回、何百回と語ろう
とすることは、すなわち愛情だ。わけのわからないヤツにそんなこと語るわけがない。そ

⁵ 「クレインズクラブ」、仲間に使い込まれて借金を背負った。

れがわからなければオレと一緒に来るな」といったわけです。

もうだいぶ前のことだったのですがね、これはまともに色をなしていいました。自分の忘れられない青春のことを、何回となく同一人物にいうことは愚痴じゃないんだ。よほど安心してるか、信頼してるか、愛してなきやいえない。ボクはそういうのが夫婦だと思ってるんです。

その夫婦も、もう 25 年過ぎました。もうホれたハれたじゃない。でも、それはやはりある瞬間に確認し合わないとダメだね、いくつになっても⁶。ボクはそう思いますよ。いつでもボクは「大学生」でいたいし、女房には「女学生」でいてほしいわけですよ。

さきほど話した 12 月 6 日の会の日ね、ボクは学生服着ます。学帽もかぶります。関西大学の昔の学生服で、学帽も現役のときのもので。毎年そうします。出来の悪い学生だったですけど、「学帽」だけは残しておいた。残しておいてよかったと思ってますよ。

(文責・本誌記者)

⁶ それがレコード、S47.4「惚れた」、S55.11「笑顔をありがとう」（銀婚式記念か？）になったと思う。